NUSOM Summer Program に参加して

名古屋大学医学部医学科５年
中下　竣介

１．概要

2026 年 7 月 7 日から 13 日までの１週間、NUSOM Summer Program に参加しました。このサマープログラムは、アメリカ、イギリスの医学生９人と共に日本の医療について学び、各国の医療制度や現状、問題点について英語で議論しながら交流を深めるというものでした。この１週間を通して、たくさんの貴重な学びを得ることができ、かけがえのない友情関係を築くことができました。

２．内容

（１）７月７日

まず、病棟、オペ室、ヘリポートをツアーとして見学しました。日本と海外との違い・似ている点を共有し、とても学びになりました。また、普段我々が親しみのある場所を海外の学生に英語で説明することを通じて、自信もつきました。その後研究科長表敬訪問、昼食を終え、午後は医療倫理についての講義とディスカッション、各ラボ・診療科訪問を行いました。ディスカッションでは、先天性心疾患をもって生まれてくる可能性がある胎児のケースについて、母親の視点から、そして医療者の視点からどう感じるのか、また何を知りたい・伝えたいと思うのかについてお互いの意見を共有し、新しい視点を得られました。ラボ訪問では、Buddy の Kosuke、Alfredo と泌尿器科を訪問しました。赤松教授から泌尿器科の歴史や日本の泌尿器科の特徴を、Alfredo からはアメリカの泌尿器科の特徴や彼が行った研究について共有してもらい、かなり似ている部分も多いなと感じました。また、病棟回診、画像カンファレンスにも参加し、泌尿器科のルーティーンを経験する貴重な機会となりました。

１日の終わりには寿司パーティーがあり、各国の食文化などについて話して交流を深めました。様々な学生の趣味や興味のあることを聞けて、自分の視野も広がりました。

（２）７月８日

まず Medical xR Center を訪問し、オペシミュレーションを AI で行い、腹腔鏡下で練習できるシステムを実際に体験しました。腹腔鏡は手先の感覚が実際とは異なり、空間認識能力も求められるため、非常に興味深いです。アメリカの学生たちもこういう経験は初めてだと話していて、お互いにとってとても有意義な経験になりました。

次に、国立長寿医療研究センターを訪問し、高齢者やリハビリに特化した医療体制や応用技術について学びました。患者だけでなく、介護を行う医療者側にとっても有用な技術を実際に体験することができ、これからの高齢化社会にとって有用な知見を得ることができました。

夜には海外の学生を交えて飲みに行き、交流を深められたのもいい思い出です。偶然この日は僕の誕生日で、Alfredo がスマートに僕を会計から省いてくれていたのが印象的です。

（３）７月９日・10 日

岐阜・美濃・名古屋を拠点に在宅医療・訪問診療を展開しているかがやきクリニックを訪問しまし

た。９日にはレクチャーを聞き、患者の人生に意味や目的を与える「いきがい」という概念について理解を深めました。その後の美濃市街の散策では、浴衣を着て、風情ある街並みを海外の学生と一緒に歩き、お互いの伝統的な文化について話しました。夜には鵜飼を見に行き、自らの地元でもある岐阜の伝統を海外の学生に伝え、興味を持ってもらえたことがとても嬉しかったです。海外での、祭りや花火大会に対する印象を知れたのも興味深かったです。

10 日には、９日に海外の学生が訪問診療に同行した患者について、Care Map（患者の状況やこれからのプランについて包括的に示したマインドマップのようなもの）を作成しました。日本語では作成したことがありましたが、英語で、かつ「いきがい」を含んで書くのはこれが初めてで、とても有意義な経験となりました。同時に、医療単語を知らないと太刀打ちできない場面にも遭遇し、自らの学習スタンスを見直す良い機会にもなりました。昼には Come Come Swallow を訪問し、嚥下障害についての講義を聞き、実際に嚥下調整食も経験しました。また、リハビリテーション病院も見学させていただき、病院が医療を受ける場所であるだけでなく、患者同士をつなぐコミュニティとしても機能していることを感じました。人々が疎遠となりつつある現代社会において、病院のこのような役割もまた重要であると考えます。かがやきロッジに戻ってからは、市橋先生が寿司パーティーを開いてくださり、皆で日本の食文化を楽しめる機会をいただけてとても感謝しています。

（４） 7 月 13 日

午前は Dr. Desai による感染症の講義が行われ、日本ではあまり馴染みのない様々な感染症についても、実際の症例を交えて学べたのがとても印象的です。午後には、まず理想的な医療について班でディスカッションし、日本とアメリカの違いを比較しつつ、両方を取り入れたより良い策について意見を出し合いました。国土や民族の違いによる部分も大きく、現実化することの難しさも感じました。その後最終発表では、各 Buddy が経験した医療・文化の違いを共有し、自分たちの Buddy が感じたこと以外にも色々な違いがあるのだと感心しました。

３．さいごに

このプログラムを通して、日本の医療制度や地域医療について学べたのはもちろん、海外の学生と交流することで、文化面でも大いに交流でき、また英語で医学を学ぶことについて自分なりの今後の方針が立ち、とても実りある経験となりました。来年には臨床留学に行く予定ですが、それまでにどういった準備をすべきかも、実際に医療従事者と英語で関わることで、肌で体感できました。最後にはなりますが、このような貴重な機会を準備してくださった国際連携室の粕谷先生、長谷川先生、Dr. Montero、スタッフの皆様にお礼申し上げます。






BeReal.